月刊

こころのとも

第十五巻
五月号

消えていく母の愛

母の愛が
人に対する優しさを
育てる

なのに
その愛が
だんだんと
失われてきている

だから
平気で人を
傷つけ殺す人が
だんだんと
多くなっていく
ことだろう

中国の腐敗

中国は
日本以上に
金銭に
執着強め
腐敗深めり

人生を考え直して みたい人は（一二四）

―空海『即身成仏義』解説（二五）

〔（八）―2　『金剛頂経』の金剛法身〕

また、『金剛頂経』に云く、

「自性所成（じしょうしょじょう）の眷属（けんぞく）、金剛手等の十六大菩薩、ないし各各に五億倶胝（くてい）の微細（みさい）法身の金剛を流出（るしゅつ）す」と。

是の如く等の文は、また是れこの義なり。

〔（八）―3　法然具足〕

法然といっぱ、諸法自然（じねん）に、是の如くなることを顕わす。具足とは成就の義、無欠少の義なり。薩般若とは梵語なり、古く薩云（さつうん）と云うは訛略（けりゃく）なり。薩羅婆枳嬢曩（さらばきじゃのう）と云う。翻じて一切智智と云う。一切智智とは、智とは決断簡択（けんちゃく）の義なり。一切の仏、各（おのおの）五智・三十七智、乃至刹塵の智を具せり。

先月号に続きまして、現代語訳を金岡秀友訳・解説の『空海即身成仏義』（太陽出版刊）から引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

また、『金剛頂』の経典には、つぎのように説かれています。

「法身の自性である六大を、そのままおのおのの本体として成り立っている（自性所成）、大日如来の眷属、すなわち金剛手などの十六大菩薩をはじめとする諸尊は、それぞれに数えきれないほどたくさん（五億倶胝）の、微細にして金剛のように堅固なさとりの境地にある法身を流出する。」と。

これらの経文もまた、「法然具足」の意味を明示しています。「法然」というのは、いっさい（諸法）が、各自にもともとそなわっている本質のそのままに、おのずからそれぞれの在り様になる、という意味をあらわします。「具足」というのは、成就の意味であり、完全に達成されているので闕（か）けるところがまったくない、という意味です。

「薩般若」とは、梵語の発音を文字に写した言葉です。旧訳で「薩云」といっているのは、なまって中間の音を省略した言葉で、正しくは「薩羅婆枳嬢曩（さらばきじ

ゃのう）といい、「一切智智」と翻訳します。「一切智智」の「智」とは、正邪善悪を正しく判断し決めて、まちがいなくえらびとる（決断簡択）ことを意味します。時間・空間をこえた有形・無形のすべてが法身のあらわれですので、法身に本来そなわっている「五智」「三十七智」をはじめとする数かぎりない（刹塵）智が、そのいっさいの仏身にそれぞれ、もともとそなわっているのです。

＊　＊　＊　＊

この解説的現代語訳をお読みになれば、あまり難しいところはないように思います。これまでに述べられたことの復習になっているように思えます。ただ、常識では判断できないと思えるところを少しだけ解説してみたいと思います。

それは、ここでの主題であります「法然に薩般若を具足する」の中の「法然に具足する」の部分です。それは、現代語訳では、次のように述べられています。

「『法然』というのは、いっさい（諸法）が、各自にもともとそなわっている本質のそのままに、おのずからそれぞれの在り様になる、という意味をあらわします。『具足』というのは、成就の意味であり、完全に達成されているので闕（か）けるところがまったくない、という意味です。」

「法然」は「いっさい（諸法）が、各自にもともとそなわっている本質のそのままに、おのずからそれぞれの在り様になる」ということですが、なかなかご理解いただけないのではないかと思います。

これまでに何度か述べてきたと思いますが、私は、人間は、髄識（無意識）に如来を宿していると考えていますが、でも、その本質のまま自ずからそれぞれの在り様によって、人間が如来さまのように成れるかと言いますと、そうはなりません。そこが、人間の悲しいところですし、面白いところでもあるのです。

人間以外の存在はあるがままにあるのですが、人間が「薩般若」を「具足する」には、修行がいるのです。お大師さまの説かれる通りに、ひたすら修行しなければならないのです。

しかも、修行すれば必ずそうなれるか、といいますと、そうはなりません。それは、その人のもつ業の深さや根性のあり方によって左右されます。でも、ひたすら修行に励むとき、無限にその境地に近づくことができるのです。ということは、無限に「大楽」に近づいていくことができるということです。

自作詩短歌等選

誰が陶冶できるのか

民主主義は
あらゆる権威を
否定する制度だ

親の権威も
教師の権威も
否定して
子どもには
自分が
一番偉いと思えと
教えている

こんなことで
知識・技能を
身に付けさす以外に
だれが人格陶冶を
してやれるのか

弱者の肉を食う強者

人間にとって
最大の悪徳は
驕慢・傲慢だ

自由競争は
弱者の肉を
強者に食べさせ
強者をますます
傲慢にする

その結果
強者は
弱者の肉を食らっても
なんら良心の呵責を
感じないのだ

虐待の拡大再生産

被虐待経験が
新たな虐待を生む
これを
虐待の「負の連鎖」
と言うらしい

私に言わせれば
これは
虐待の「拡大再生産」だ

なぜなら
民主主義では
世代が進むほど
自己肥大・他己萎縮が
進行していくから

神・仏が宿る

ある写真家が
風景に神宿る
と言っている

風景だけではない
あらゆる存在に
神・仏が宿っている

だから
物も
生き物も
人も
みんなみんな
うやまい
大切にしよう

犯罪被害に会う不安

犯罪被害に
会うのではないか
という不安が
国民の間に
高まっているらしい

年々
巧妙で凶悪に
なっていく犯罪

昔なら
滅多に起こらないような
凶悪な犯罪が
毎日起こっている

他己の萎縮以外の
何者でもない

日本人よ
世界に先駆けて
規範性を高めよう
信仰を取り戻そう

被虐待児の幸せ

ひんぱんに
新聞賑わす
虐待の
ニュース聞くたび
こころ痛みぬ

深き業
背負いし子らに
幸せを
与えて行こう
福祉に就いて

どこまで続く自己主張

フランスの学校では
イスラム教徒の
女子生徒が
頭に着ける
スカーフを
法律で
禁止したという

それにたいして
イスラム教徒の
抗議デモが
起こっているらしい

個人の自己主張
家族の自己主張
地域の自己主張
国家の自己主張
民族の自己主張
宗教の自己主張

自己主張
自己主張
自己主張
どこまでいっても
自己主張

いま多い教師像

いま多くなっている
教師像

学校を辞めたがる教師
精神障害を起こす教師
生徒指導のへたな教師
理想像を持たない教師
操行のよくない教師
教育愛に欠けた教師
自殺したがる管理職

自作随筆選

人質事件と自己責任

先月号（四月号）の随筆で、世界の中では、日本の高校生の意識が特異なものであることを述べました。

今月号も、日本人の意識の特異性について取り上げることになりました。それは、イラクで3人と2人、2度にわたり、日本人が人質として拉致された後、解放された時の日本人の反応についてです。

私は現在、主として毎日新聞に目を通していますが、そこで得られた情報によりますと、その反応の幾つかは、次のようなものです。

①小泉純一郎総理「多くの政府の人たちが寝食を忘れて救出に努力したのに、なおかつそう言うんですかね。自覚をもっていただきたい」（16日、解放された人質がイラクでの活動を続けたいと発言したことを受け、記者団に）。

②福田康夫官房長官（当時）「（自己責任は）NGOや報道の役割という議論以前の常識だ。人に迷惑をかけるのに、十分に注意せずに信念を通す人を称賛すべきだろうか」（21日の参議院本会議で）。

③神崎武法・公明党代表「復興支援は民間人では無理。仕事で行かざるを得ないなら、警備をつけるなり、自己責任で対応していただきたい」（18日、島根県での講演で）。

④自民党の柏村武昭参院議員「反日的分子のために十数億円もの血税を用いることに強烈な違和感、不快感を持たざる得ない」（26日の参院決算委員会で）。

⑤逢沢一郎副外相「事故があった時必要となるエネルギーやコスト、そしてもっとも大切な国民一人一人の命に思いを致す時、（途中省略）もっと慎重に」（26日付け毎日新聞への投稿で）。

政府が何度もイラクへの入国制限や出国を勧告（退避勧告）したにもかかわらず、危険を犯して入国し、人質になったことに対する非難は、この他にもテレビや新聞などのメディアで多く報道されたようです。

勿論、こうした非難の意見の他にも、好意的な意見があったことは言うまでもありません。でも、16日以降の毎日新聞への読者からの投稿意見は、大多数が非難するものだったそうです。

さて、日本国内では、自己責任論が意見の大勢を占めたのですが、それを外国のメディアは総じて、いぶかし

げに思ったようです。

例えば、フランスの主要新聞であるルモンド紙は社説でこの問題を取り上げ、「5人の使命感をたたえると共に、まるで『犯罪者』のように扱う日本社会の特異性を指摘し、有力政治家から『危険地帯への渡航禁止の法制化も含めた検討をすべきだ』との意見が出たこと」を驚きをもって伝えた、といいます。

また、アメリカでも解放された人質が日本で冷淡に扱われたり、非難の声を浴びせられたりしたことに、驚きが広がっているようで、米主要紙には22日から23日にかけ「ＯＫＡＭＩ（お上）」や「ＪＩＫＯＳＥＫＩＮＩＮ（自己責任）」という日本語が並んだそうです。

例えば、ロサンゼルス・タイムズは「敵意の渦中への帰還」という見出しで人質への対応問題を特集していて、小泉純一郎首相が政府の退避勧告を無視しイラク入りした人質を、自己責任論を振りかざし非難したと伝えた、といいます。また同紙は、対照的な例として、カナダの人道援助活動家の人質が地元モントリオールで温かい歓迎を受けた例を紹介し、日本の例は「西側諸国とまったく違った現象だ」と評したといいます。

さらに、ニューヨーク・タイムズ紙は、日本では「政府に背き個人の目的を追求することが許されない」と断言し、有名企業が尊重される日本では、人質となったのが「フリー」のジャーナリストだったことで疎外されていると、伝えているそうです。

こうした反応は、マスメディアだけではありません。アメリカ国務長官のパウエル氏は「彼らのような市民や、危険を承知でイラクに派遣された兵士がいることを、日本の人々はとても誇りに思うべきだ」「私たちは『あなたは危険を冒した、あなたのせいだ』とは言えない。彼らを安全に取り戻すためにできる、あらゆることをする義務がある」と発言しているのです。

こうした海外（欧米）の反応に驚き、多くの日本人評論家が、自己責任論の「不当さ」について記事を書いています。しかし、それらは、詳しくは紹介しませんが、日本人がバッシング傾向を強めているとか、日本人に思いやりがなくなったとか、国家意識や精神が荒廃しているとか、政治理念を喪失しているとか、といったもので、なぜ、そうなっているのかといった指摘が、一つも見当たりません。あるいは、なぜ、欧米人は、称賛するのに、日本人は、全く逆に、非難するのか、その説明が一つもないのです。

確かに、日本人は、いま右に見ましたような傾向が強めていることは、否定できないように思います。

実は、そこにこそ、日本人の心性の特異性があるのです。それを指摘しなければ、日本人がこうこうなっていると言ってみても、それを改善することはできないのです。以下、私の考えを少し述べてみたいと思います。

日本人が危険な地域に入っていく動機についてですが、それが、ボランティアであろうと、報道のためであろうと、そこに他者性（私の言葉でいいますと他己）が欠如しているからなのです。

欧米では、いまでも、そうした危険地帯に入ってボランティアをしたり、報道したりする動機は、なにがしか他者のためにするものだという認識が、人々の間に存在しているのです。ですから、そうした行為は、尊いものとして人々から称賛されるのです。

ところが、日本人は、欧米人以上に自己を肥大させ他己を萎縮させていますので、そうした認識が、殆ど失われているのです。行動の動機を、どこまでも、自分のためだと考えているのです。行為する本人もそうなら、それを見る他者もそうなっているのです。ですから、その責任も自分だけのものになっていくのです。

ところで、前述の評論家諸氏が指摘しました日本人の精神的傾向は、いずれも自己肥大・他己萎縮の結果なのですが、それらについても、ここで、ついでに見ておきたいと思います。

まず、「日本人がバッシング傾向を強めている」という点ですが、心理学の用語で言いますと、バッシング傾向は、攻撃性ということになると思います。

私は、人間の「自己」を構成する「情動」は、主に、①欲求と②情緒と③気分からなっており、その中の欲求は、主に、①食欲（物欲・金銭欲なども含む）、②性欲（子孫繁栄欲も含む）、③優越欲（権力欲や名誉欲を含む）からなっていると考えています。

攻撃性は、この最後の優越欲の一つなのです。人より優れていたいと言う欲求は、言い換えれば、人と比較して、人に勝っていたいという欲求だと言えます。人に勝つことは、人を攻撃することでもあります。

人間が自己を肥大させ、他己を萎縮させますと、この傾向はぐんと強まります。攻撃性を含めて自己の欲求追求にブレーキが効かなくなった状態が起こるのです。

いま、子どもや若者だけではありませんが、弱いものいじめが、かなり一般化しています。よくあることですが、若者が、ホームレスの人をいじめて殺してしまう事件が起こります。

また、スポーツの異常な隆盛は、この傾向に基づくものだと思います。海外で活躍するスポーツ選手のニュー

スが、テレビ・ニュースのトップに来たりします。もっと大切だと思われます「どれほど他者を援助するために人々が努力しているか」とか、「どれほど多くの人々が生活に困窮しているか」とか、「国際的に争いがどれほど多く起こっているか」とか、「争いを避ける宗教的な努力がどれほどなされているか」とか、「人々がどれほど仲良く暮らしているか」とか、といったニュースよりも先に取り上げられるのです。私から見ますと、まったく異常としか言いようがありません。

次に、「日本人に思いやりがなくなった」という点ですが、これは、これまでも、何度も多くの人によって指摘されてきた点だと思います。まさに他己萎縮そのものと言えるものです。

私の言葉でいいますと、思いやりは、「他己」の「感情」の働きです。他者の痛みを我が痛みとし、他者の喜びを我が喜びとするこころの働きです。私は、この働きを「情動の共有」とか「人の心を感じるこころ」とか呼んでいます。仏教では、この働きは、はかり知れない利他の心である「慈悲喜捨」の四無量心に含まれます。

次に、「国家意識や精神が荒廃している」とする点ですが、これらも、いずれも他己の萎縮から起こることです。日本人は、いま、自分の「利益と選好」のみを行動の動機としています。そこには、人間らしい精神的要素は含まれないのです。

次に、「政治理念を喪失している」とする点ですが、これも他己の萎縮から起こっています。

政治とは何かですが、私は、それは、あらゆる人がお互いに幸せに生きていけるように、あるいは、この世に住む人々が安心して仲良く暮らしていけるように、努力することだ、と考えています。

それは、自分が幸せになるだけではなく、他者が幸せになることなのです。この他者性の要因を欠くとき、それは真の政治とは言えないように思うのです。

例えば、いま、アメリカは世界の正義だとばかりに、国際政治の面で、軍事力を振り回しています。でも、詳しくは述べませんが、それが、果して他者性の要因を保っているのでしょうか。全くの疑問です。

振り返って、日本を見てみますと、アメリカ以上に他者性が欠如しているように思えます。（敗戦国）イラクの人々の幸せのために、あるいは、イラクがいかなる状況にあるかの報道のために、危険をかえりみず身を捧げる人を、「国家エゴ」を振りかざして謀叛者のように見なす発言をすることは、真の（国際）政治とは何かが、分かっていない者の行為だとしか思えないのです。

釈尊のことば（一三三）

―法句経解説―

（三九四）愚者よ。螺髪（らはつ）を結うて何になるのだ。かもしかの皮をまとって何になるのだ。汝は内に密林（＝汚れ）を蔵して、外側だけを飾る。

出だしの「螺髪（らはつ）を結うて何になるのだ」という部分は、一つ前の（三九三）に出ています、「螺髪（らはつ）を結っているからバラモンなのではない」と同じ趣意です。

次の「かもしかの皮をまとって何になるのだ」の「かもしかの皮」ですが、中村元訳注には、「カモシカの皮の衣。今日でもインドの行者（ぎょうじゃ）はかもしかの皮をまとって、うずくまっている」とあります。

つまり、この偈は、バラモンの行者がするように、螺髪を結い、かもしかの皮の衣をまとって、「外側を飾ってみても、内に密林（＝汚れ）を蔵して」いては、真のバラモンとは言えないと詠じている、ということです。

では、この「密林（＝汚れ）」とは、何かですが、中村元訳注によりますと、「貪欲などの煩悩のことを密林に譬えていう」とあります。

理屈っぽくなって恐縮ですが、この密林（＝汚れ）は、単なる煩悩ではなく、欲望への執着のことのように思えます。煩悩の定義にかかわることだと思いますが、人間は誰でもが、煩悩をもっています。それは、生きていこうとする（あるいは死を怖がる）衝動なのです。私の、「自己・他己双対理論」で言いますと、「自己」の髄識（無意識）に宿した生きる力、生命力です。顕教（密教以外の仏教）では、「煩悩無尽誓願断」といっていますが、密教では、そうは言いません。確かに、煩悩は無尽なのですが、それを断つことは、実は、できないのです。ですから、断つのは、煩悩そのものではなく、煩悩への執着なのです。

では、執着を断つことがいかにして可能なのかですが、それは、私の理論で言いますと、「他己」の髄識に宿しています「如来」さまと、この煩悩とが一体化し、統合されることによって可能になるのです。

でも、それは、髄識（無意識）でのことですので、意識して統合することは、不可能なのです。意識してできることは、釈尊やお大師さんの教えを信じ、その教えの通りに修行することなのです。

人間は、この偈の通り、外を飾ってみても、決して幸せは得られません。内を磨かなければならないのです

（三九五）糞掃衣（ふんぞうえ）をまとい、痩せて、血管があらわれ、ひとり林の中にあって瞑想する人、――かれをわれは〈バラモン〉と呼ぶ。

「糞掃衣（ふんぞうえ）」とは、いかにも汚そうな呼び名ですが、中村元訳注によりますと、これは、サンスクリット語の音写のようで、「塵埃」の事だそうです。糞掃衣とは何かですが、それは、「その塵埃の中から拾い集めたボロ切れを洗い、縫い合わせた衣で、もとは出家者はこのようなものを身につけていた」そうです。

外を飾るのではなく、どこまでも質素で、人が捨てたようなものを集めて衣服として、食べ物も質素にするせいで、血管が浮いてくるほど、痩せている。そして、人との触れ合いが制限される林に一人入って、瞑想に励む。そうした人を、釈尊はバラモンと呼ぶ、とおっしゃっています。

これは、修行僧のことですので、皆さんに一般化することはできませんが、でも、この精神は、誰でもが尊重すべきものだと思います。

その精神の一つとは、生活を質素にすることです。私は、「ひびきのさと」の「訓言」として次の四つを挙げています。

〔①他心感応　②専心勤労　③質素倹約　④聖道修証〕

この中の三番目に入れています③質素倹約がそれに当たっています。

日本やアメリカは、現在、贅沢の限りを尽くしています。日本のコンビニには、弁当のような食べ物が、いろいろ並べられていますが、売れ残って、日持ちのしないものは、誰もたべないで、あるいは家畜の餌にもしないで、毎日のようにゴミとして捨てられるようです。

こうした、有り余った食べ物に取り囲まれて、多くの人は、食べ過ぎ、肥り過ぎて、成人病に陥っています。

また、古着屋に行きますと、体育館のような広いところにさまざまな衣類がぎっちりと並べられていて、気に入ったものを選ぶのに何時間も掛かるほどです。

また、建物は、まだまだ直せば使えそうなものでも、取壊し、新しいものに建て替えられています。

このように、日本では、現在、衣食住のどれをとってみても、贅沢になっています。こんな無駄な生活がいつまで続くのでしょうか。必ず行き詰まりが来ることでしょう。

釈尊の精神を理解し、それに則って生きて行かなければ、大げさなようですが、人類の未来はないと思えます。

後記

一、今年の五月はよく雨がふります。新緑の美しさは、また格別ですが。

二、今年は、水田に稲を植えたいと思い、準備をしています。先日も、ヤンマーの古い四条植えの田植機を買いました。四反ほどの水田がありますが、約一反だけ植えたいと思っています。苗は、知人がご好意で、一緒に育てて下さっています。

三、いま、畑にはタマネギ、ニラ、オクラ、ナス、ジャガイモ、里芋、カボチャなどを植えています。タマネギはもう少しで収穫します。

四、美作大学で、やっと、ホームページが開設できました。登録されれば、多分、ＧＯＯＧＬＥかヤフージャパンで検索しますと、鳴門との両方が出るのではないでしょうか。鳴門のがいつまで出るのか、知らないのですが。

五、引っ越しは、まだ続いています。先日、大物の車庫（五・三メートル×五・七メートル）を、こちらが立ち会いながら、「イナバ物置」専門の業者の方に取り壊して頂き、すぐトラックに積み込んで、こちらに運んできました。基礎を地元の方にお願いしていますので、その上に、自分で組み立てたいと思っています。壊し方を見ていましたし、イナバから組み立て図を送ってもらっていますので、多分、できるのではないかと思っています。

六、三月の終わり頃のことなのですが、トラックの車検をユーザー車検ですませました。前回（昨年）は、十数万円もかかりましたが、今回は、半分以下ですんだと思います。はじめてのことでしたので、車検場に下見に行き、書類を入手するやら、車検の現場を見学するやら、しました。検査当日も「はじめてですので、よろしくお願いします」と言いましたら、親切にして下さいました。実は、番号灯二つの中の一つが切れていまして、近くのトヨタのディーラーで直して、再検査になり、やっと通ったのでしたが。皆さまもお試しになられては・・・。

月刊
こころのとも
第十五巻
五月号
（通巻
一七三号）

平成十六年五月八日
〒７０８―８５１１
岡山県津山市北園町５０番地
美作大学　児童学科気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０